獅子文六全集

獅子文六全集 第十一
全十六巻／第十四回
八百

昭和四十四年六月二十日印刷発行
著者 獅子文六
装幀 芹澤銈介
発行者 大田信男
印刷所 凸版印刷
発行所 朝日新聞社
東京 大阪 北九州 名古屋

第三巻／目次

東京温泉　三
虹の工場　九五
太陽先生　二三一
南の風　三八一

東
京
温
泉

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

昭和十四年七月二日—九月二十四日『週刊朝日』

青雲漠々

一

「ねえ、あんた」
「なんだ」
「なんだじゃありませんよ。ちっとは、考えて下さらなけりゃア――」
と、焦ったそうに、舌打ちをしたのは、三角形の眼が斜めに釣り上って頬骨が出て、唇が柳の葉のように薄い女である。というと、いかにも悪女の標本みたいだが、その割りに毒気のない人相で、年齢にしたって、見かけの四十五、六より、少しは若いかも知れない。
「はア、なにを考えるかね」
「なにをッて、わからないんですか」
「わからんよ」
「まア、呆れた……先刻から、あれ程いってるのに、聴いていなかったんですか」
「聴いてたとも」
「そんならわからないはずはありません」
「聴いてればわかるとは限らん」
と、五十五、六の、血色のいい、顔も身体も円くできた男が、漸く、書物から眼を放した。書物といっても、『インフレ来りなば』という、薄いパンフレットである。
「嘘、仰有い。本に夢中になってた癖に――」
「いや、そんなことはない。この本は、下らんことばかり、書いてある。俺ア、勘違いをしていたよ。インフレが来ても、損をしない法なんて、俺達に用はないじゃないか。インフレの浪に乗って、一旗揚げる方法でも書いてあると思って、俺ア……」
「一旗も二旗もありゃアしませんよ。どんな世になったって、あんたにお金の儲かるはずはありませんからね」
「バカをいいなさい。なるほど、今までは、失敗ばかりしていた。どんなに企画がよくても、運が向かない間は仕方がない。しかし、一朝、人生の機運が熟すれば……」
「ああもう、止して下さい。耳にタコができてますからね」
と、細君は、ほんとに堪らなさそうに、眉を顰めて、縫物の針を、速めた。
「止せというなら、やめるさ、お前が話しかけるから、口を利いたまでだ」
と、大欠伸をして、良人はゴロリと、横になった。昼寝でも始めるかと思ったら、今、悪口をいったばかりのパンフレットを、一心に読み続けるのである。

一向に涼しくない風が、店番をしている細君の側を、通り抜けて行く。日盛りの往来から、紙類の多い商店へ、眩しい反射を送っている。

「ねえ、あんた……」

細君は、再び、閾越しに声をかけた。

「なんだ」

「なんだじゃありませんよ。ちっとは、考えて下さらなけりゃア……」

「また、始まった。お前の話は、循環小数みたいだな。一体、何を考えればいいんだ」

「わからないんですか」

「わからない」

「鰹の切身が十三銭するんですよ」

「鰹の切身？」

「ええ、去年は、八銭から六銭で買えたんですよ。鰹の切身ばかりじゃありません。子供達の浴衣を見に、渋谷まで行ったら、あんた、一反いくらになったと思います？」

「さア、知らんね。しかし、お前のように、心配せんでもいいよ。政府でも高物価対策は、充分に講じてるのだし……」

「だってグングン高くなってく一方ですよ。炭だって、今はそんなに費わないからいいようなものの、高いこと高いこと……今年の冬は、思いやられます」

「冬のことを、今から心配したって仕様がないよ。まア、物価が騰っただけ、店の品物を高く売れば、バランスがとれらアね」

「ところが、サッパリ売れなければ、仕方がないじゃありませんか」

と、細君は怒気を含んで、良人を睨めた。

「不思議だな」

「ちっとも、不思議じゃアありません。元々、こんな処へ文房具店を出したのが、間違ってるんです。中学校なんて、いつまで経っても、建ちゃアしないじゃありませんか」

「見込み違いという奴は、どんな事業にもあることだからな」

良人も、この返事は仕慣れているので、流れる如く、スラスラと出る。

「あんたのは、一年中、見込み違いばかりですね。事業が、聞いて呆れますよ。あんたがおとなしく、教師を勤めてさえいれば、こんな憂目は見ないで済んだんですよ。毛馬内さんを御覧なさい。とにかく、不自由なく生活していらっしゃるじゃありませんか」

「なアに、毛馬内だって、ラクじゃないさ。彼奴は仙人だから、金の使い道を知らんだけさ。それに、細君はいないし、子供はないし……」

「その子供が、家には、六人もいるんですからね」
「知ってるよ」
「それなら、ちっとは考えて下さらなけりゃア……」
細君のいうことは、また出発点へ、逆戻りするのである。
「ねえ、あんた……夜学でもなんでもいいからもう一度、学校へ出て下さいな。毛馬内さんにでも頼んだら、口がないことはないと思います。あんたが三十円でも、五十円でも、稼いできて下されば、店の収入と両方で、どうやら生活して行けないことはないんですからね。今のままじゃア、とても、あたしはやって行けませんよ」
細君は、いつか、縫物の手をやめて、店から座敷の方へ、乗り出してきた。子供達の顔の見えない今こそ、亭主に諫言の好機会と思ったに違いない。
「そう心配しなさんな、まア、今に見とれ。一朝、機運熟すれば……」
「駄目々々……。そんな気休めは、もう沢山ですよ。今日は、あたし……」
と、細君が、ここを先途と挑みかかる時、惜しい哉、店に客の声がした。
「毎度、ありがとうござイ……」
便箋一帖を売り終って、さて叱言の続きをと座敷へ帰って来た時には、五ツになる末ッ子の留雄が、スヤスヤと昼寝をしているだけで、亭主の影も形もなかった。
「また、碁会所へ逃げた……」
細君は、口惜しそうに、舌打ちをした。

二

この文房具店は、青雲堂といって、主人の垂水欣造は、その昔、芝の花園中学校で、教師を勤めて、二十年近い歳月を過ごした。
この間に、彼は一日だって、教師の職に満足したことはなかった。殊に、彼は教員室の空気がひどく性に合わなかった。弁当の塩鮭の匂いのする口から、ボソボソと、不平な泣言ばかりいっている同僚を見ると、彼は居耐らないほど、苦痛を感じた。
その腹癒せか、彼は教壇に立つと、生徒に、法螺を吹く癖がついた。
「ええか、諸君……男子須く、大志を持たにゃアいかんよ。尺を望んで寸を得るという諺が、真実とすれば、なおさら、大なる希望と野心とを懐かなくちゃアいかん。然るに何ぞや、諸君はまるで蛋のキンタマの如くちッぽけな……」
今から十年前の東京の中学生は、頗る現実的であったから、こんな空言を口走る教師を、忽ち軽蔑した。殊に教室において、キンタマなぞと下卑た言葉を用いるのは、軽蔑

に値いした。そこで、垂水欣造に「タルキン」という綽名が生まれて、タルキンの時間には、誰も彼も、欠伸や居眠りをした。

教場ではそんな有様だったが、教員室でも、いつとも知れず、彼は綽名で呼ばれていた。送別会や忘年会の席で、酒が回ってくると、彼が管を巻く文句はきまっていた。

「なアんだい、君等は、郵便貯金の利子ばかり勘定して……。我輩は、まだ青雲の志を失わんぞ」

同僚は、彼に「青雲居士」の称を奉った。勿論、尊敬を意味する綽名ではない。いい齢をしてバカな奴だと嗤っているのである。

もっとも、主人の垂水欣造にしても、自分の未来に、確乎たる信念や計画が、一つだってあったわけではない。ただ中学教師として、一生を限定されるのが、苦痛で堪らなかっただけである。彼は銀行会社員になったとしても、恐らく同様の嘆きを発したに違いない。月給を貰う職業が、性に合わないともいえる。彼は、いつも希望と夢を持ち続けられる生活でなければ、息が詰まりそうになるのである。

「俺ア、相場師になればよかったな」

教師にある身で、不届きにも、彼はよくそんなことを考えた。といって、そのころ株にも米にも、何等知識がなかったから、この望みも、ただ空想に終るだけだった。

彼の青雲の志は、一体、何を目指しているのか、自分にも分らなかった。成功とは、まったく、雲を摑むような話である。白い雲なら、まだ形もあるが、青い雲は、無限の大空のことだから、一向に手掛かりがない。

だが、満々たる不平を懐きながらも、彼は二十年近く、教師を勤め上げた。その間に、一郎、春子、秋子、二郎の順で、四人の子供が生まれた。胸中に不満があるから、子供の名なぞ考えるのが面倒臭くて、出たとこ勝負の平凡な命名にしたのである。

そのうち、花園中学校は、地代の騰貴に苦しめられて、郊外への移転の議が起った。教員室の評判では、移転先きは、どうやら目黒の某所だということだった。それを聞くと、彼はムラムラと、謀反気を起した。

「ありがたい。教員生活をやめる時が来た」

彼は郷里の田畑を売り、それに学校の退職手当を加えて、花園中学校の移転予定地の角向うに、文房具店を新築した。青雲堂という看板を掲げて、めでたく開業した。学校が移転すれば、生徒はいやでも学用品を買いにくるだろう。彼は細君に店を任せて、自分は青雲の志伸展の方に励もうと考えていた。

ところが、突然、学校の方針が変って、校舎は思いがけない場所に移転することになったのである。青雲堂は、草原の前に、ションボリと一軒建ての商店としてひどく目立

った。

これが垂水欣造の山気の、最初の失敗であった。もっとも、その後、急激に付近が発展して今ではギッシリと人家が建て込んでいるが、小学校も遠いので、商品の売高は、いつまで経っても、捗々しくなかった。月の純益が七、八十円というのが、精々のところである。しかも、その間に、また子供が生まれた。五人目だから、季子と名づけて、これを最後にしようと思ったら、五年前に、また一人男子が生まれた。遉がに楽天家の垂水欣造も、大いに辟易して、生産のピリオッドを打つ工作を始めた。名前も、留雄とつけた。

子供は次第に大きくなるし、とても月収七、八十円では足りないところへ、青雲の志がモクモクと湧くので、彼はいろいろな仕事に手を出した。中学校用虎の巻の出版をやったり、保険の勧誘もしたし、地所のブローカーまでやった。儲けることもあったが、差引きすると、働き損の方が多かった。

しかし、彼は少しも屈しなかった。屈しないどころか、小鬢の毛が白くなってから、一層、成功や金儲けの信念が、強くなった傾きがある。

「まア、今に見とれ」

彼が細君や息子にいう口癖は、決して負惜しみではなかった。いつか素晴らしい運が転がり込むことを、信仰のように、固く胸に懐いていた。人間は、機運の熟さないうちは、何をやっても駄目だ。しかし、一朝、時機が到来すれば——

細君のお安さんと、息子の一郎は、いつもそれを攻撃した。二人は、性質が似ていて、至って神経質で、口やかましかった。一郎は、今年二十で乙種商業を出てから、丸の内の銀行へ通っているが、多少家計を助けているので、なかなか権力がある。父親の時代遅れな楽天主義を丸の内人種らしい口吻で、手厳しく非難するのである。

ただ、長女の春子は、万事につけても欣造の味方だった。彼女は性質も父の血を享けて、頗る朗かで、屈託がない。今年十八になっても、一向色気づいた様子もなく、年中、ディアナ・ダービンの唄ばかり謡っている陽気な娘である。彼女も、この春から、赤坂の自動車会社の女給仕として働いている。

二人も子供が稼ぎに出ているのだから、よほど生活もラクになったはずなのに、細君のお安さんは、一向安んじないのである。亭主と反対に、何事も気になって耐らない性分の上に、俄然、昨今の物価昂騰で、怯え立っている。そこで、亭主も働きに出てくれたらと、考えついたのだが、一つには、彼を定職につかせれば、例の山気を封じる手段になると、思うからである。

垂水欣造一家の戸籍調べは、まず、ザッとこんなところ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と、思って頂きたい。

三

二階の出窓に、行儀悪く腰掛けて、
「あら、きれいな、お月様！」
と、春子はお河童の髪を、のけ反らした。
「おい、危いぜ、そんなことして……」
寝転んでいる欣造が、緩慢に、注意した。緩慢にしても、彼がそんな言葉を吐くのは珍らしい。父と娘と——二人の楽天家が顔を合わせると、遺がに父親の方が苦労性めいたことをいうから面白い。
夕飯後に、例の就職問題で、細君の口が煩いから、欣造は、二階へ避難してきたのである。春子は、何となく、その後を追って来たに過ぎない。
「お父つァん、だいぶ、やられたわね」
「ふふん」
「お母さんは最近、気が立ってるわよ」
春子は、クスクス笑った。裾の短い浴衣を着て、黄色い兵児帯を締めて、まるで十五、六の男の子のような姿が、暮れ悩む宵空を後に、浮き出している。
「だけど、お父つァんに勤労生活をさせようたって、無理だと思うな。あたいは、むしろ、お父つァんが店番をして、お母さんが働きに出る方が、能率があがると思うわ」
春子は、尤もらしく、一説を述べた。
「バカをいうな。俺は、店番なんて、嫌いだ」
「そうねえ、店番てガラでもないわね。一体、お父つァんには、なにが適してるのかな」
「金儲けが、適しとるのだ」
「わアいだ。損ばかりしてる癖に……あたしの方が、よっぽどお金儲けが上手だわ」
「へえ、いつ、そんなに儲けたね」
「今日よ」
春子の出てる会社は、事変でトラックが沢山売れるので、上半期のボーナスも沢山出た。尤も、春子は本社員ではないから、ボーナスと名のつくものは貰えないが、手当と、それから社員達に貰う心付けとで合計五十円ばかりに達した。
「凄いでしょう」
「インフレだな。何を買う積りだ？」
「靴を一足買えば、それでいいの。後はソックリお母さんに渡しちまうから、お父つァんも、その積りで——そんなに急いで、教師にならなくてもいいわよ」
と、まるで五十円を五百円と間違えたような、鷹揚なことをいう。
すると、父親は父親で、
「なアに、要するに、教師の口なんか、今ごろはありはし

ないから、安心だよ。暑中休暇を眼の前に控えてることを、お母さんは知らないんだから、暢気なものさ。ハッハ、ハハ」

と、どっちが暢気なのかわからない。

涼しい月影と、爽かな微風の中で、親子は暫らく他愛のない話に耽っていると、階段の上り口から、ヌッと、母親の顔が現われて、

「あんたお客様ですよ……春子、ペチャクチャ喋ってないで、階下へ降りといで！」

「はい」

と、春子が肩を縮めて、降りて行くのと、入れ違いに、

「青雲居士、観月とは、案外風流を解するね」

と、古びたカンカン帽子を片手に、カーキ色の背広を着て、見るからに不精ッたらしい男が、遠慮会釈もなく、座敷へ入ってきた。

「やア、仙人……暫らくだったね」

と、欣造も胡坐をかいたまま、べつに座布団を薦める様子もない。

客の方は、勝手に、座敷の隅から、固くなった半麻の夏布団をもってきて、腰の下に据えた。

「暑くなったな」

「うん、暑くなった……試験で、忙がしいだろう」

「なに、大したこともない。タカが、中学生の英語だ」

と、貧弱な髭を撫ぜたのは、今の欣造にとって唯一の昔仲間、未だに花園中学校の英語教師を勤めてる毛馬内徹である。いつも人生に興味のないような、無表情な顔つきをしてるが、飄々として二十余年も勤続している。カーキ色の背広も時節柄、慌てて新調したのではなくて、汚れが目立たないで便利だといって、欣造が在職のころから、夏冬ともに、その色で通しているのである。性格は欣造と万事反対だが、どこでウマが合うのか、今もって親しく往来している。欣造は毛馬内の他に、昔の仲間で交際してる男は、一人もないのである。

「時に、何用かね」

と、毛馬内は、バットの灰を落しながら、訊いた。

「用？　べつに、用なぞない」

「訝しいな。細君からハガキがきて、貴公が、逢って話したいことがあると、書いてあったぞ」

と、いわれて、欣造は首を捻ったが、忽ち細君の例の画策だと思い当った。それで、彼は一応それを説明すると、

「なアんだ。教師になれというのか、教師なんか、下らん」

と、毛馬内は自分が教師の癖に、一言の下に反対した。

欣造は、喜色を浮かべて、

「そうさ、それを家内は……」

「女なぞ、なお下らん」

と、毛馬内は、噛んで吐き出すような調子で言った。彼

は、独身で、まだ下宿住いをしているのである。
「しかし、貴公は、相変らず、金が欲しいかね」
「勿論、欲しいよ」
「それならば……」
と、毛馬内は、なにか話を切り出した。

夏の朝

一

「お父つァん、大丈夫ですか、そんな仕事に手を出して……」
と、毛馬内が帰ってから長男の一郎は細い眉を、ピクリと動かして、欣造の方を見た。
一郎は、来年が徴兵検査で、未成年者だから煙草も酒も国法に従って嗜まない。いやいや、幾歳になっても、この男は恐らく酒や女に身を持ち崩したりする心配はあるまい。親に似ぬ鬼ッ子というか、気が小さい代りに、堅いことこの上なしで、貯金はするし、靴や洋服のモチはいいし、いつもキチンと態度を崩さず、なかなか感心な息子である。その代りに、齢より五ツ六ツもマセていて、溌剌たるところはないが、親父に意見するくらいの見識はいつでも持ち合わせている。
「大丈夫にもなんにも……資本は一文も要らんのだから、損をする気づかいはないじゃないか」
と、欣造は、泰然たるものだ。
「そりゃアわかってます。しかし……なんか、もっと堅実な仕事がありそうなものですね」
「これ以上に堅実な仕事はないよ。なにしろ、品物は美術品だ。腐りもしなければ、ローズにもならん」
「すると、あんたが、掛物や置物を背負って歩いて、商売をするんですか」
細君のお安さんが、横合いから、口を出した。
「冗談じゃない……。つまり書画骨董の仲介売買をする会社ができるのだ。その会社で日本の歴史や美術に多少とも知識のある人物が、仲間に加わってほしいのだ。——図録なぞつくる時に、そういう人間が、是非入用だそうでね」
「じゃア、月給を出すんでしょうね」
と、細君は、やや乗気になった。
「その点は、毛馬内もハッキリ知らんらしい。もちろん、タダで人を使うわけもあるまい。少くとも手当ぐらいは寄越すだろう」
「なんだか、心細いわね」
「……」
「ほんとですよ。また、つまらない儲け話に乗って、損を

しないで下さいよ」

と、釘を打つと、欣造は苦い顔をした。

毛馬内が話してくれたというのは、大体そんな性質のものだった。その話は毛馬内の許に持ち込まれたのだが、彼は学校の時間の繰り合わせがつくとしても、そんな仕事に何の興味も感じないといった。

「貴公は、国史も教えとったし、その上、慾も深いんだし、僕より適任だろう。しかし、べつに僕は貴公に勧めるわけではないんだぜ。貴公が金がほしいというから、一寸、話を取次いだまでだ」

と、いった風に、毛馬内は例の如く、冷淡であったが、欣造はひどくその話に乗気になってしまった。

「この仕事は、面白味がある」

彼一流の直感で、そう考えた。面白味というものは、別な言葉でいえば、山勘性、危険性なぞにあたる。細君の勧める夜学の教師なぞは、面白味のない点で、代表的なものだ。昨今の書画骨董の狂気的な景気を考えても、この仕事にはなにか、プンと、鼻を蠢かしたい匂いがするのだった。

なにしろ、相手は毛馬内仙人のことで、話の内容はアヤフヤだが、彼は即座にその仕事を引き受ける覚悟をきめ、それを家族の前に披瀝したのである。

ところが細君や息子は、父親が乗気の仕事といえば、それだけ危険性が多いことを、従来の経験から、チャンと見抜いているから、一向賛成の様子も見せない。依然として、夜学の教師説を主張する。

「どうも、お前達の流儀は、気に食わんよ。石橋を金槌で叩くのも結構だが、お前達のは、それでもまだ渡らんという主義だ。それじゃア、一生、ウダツの上る道理がないじゃないか」

と、しまいには、欣造も、憤然と、色をなすにいたるのである。

すると座敷の隅で、雑誌を読んでいた春子が顔をあげて、

「あたいは、どんなことでも、やって見なければわからないと思うな」

と、口を出した。

「また、お前は、お父つァんの肩をもつ……。お父つァんは、どんなことでも、やるたびに縮尻ッてるんだよ」

と、窘めると、一郎がニヤニヤ笑って、

「なアに、春子は、オーケストラの少女に、カブれてるんだよ。ディアナ・ダービンが、ほら、貧しい父親を出世させる役を演ずるだろう——あの真似がしてみたいんだよ」

「へ、お生憎様。あたいは、第一、あんないい容貌じゃありませんからね」

と、春子は妙なことを、自慢する。

「だから、映画の真似なんか、するなってんだよ」

「いつあたいが、真似をして」
「こらこら、喧嘩するんじゃない」
父親は、二人を制してから、
「まア、とにかく、俺ア、この仕事をやってみるよ。その代り、家の金は、一銭も持ち出さない——それなら、お前達も、文句はなかろう」
「いつもそういいながら、結局、あんたは……」
細君は、怨めしそうに、良人の顔を見た。

二

春子は、朝八時半に東京モータース工業の本社へ着くと、すぐに和服をセーラー服に着替えた。それは、会社支給の女給仕服だが、彼女にとてもよく似合った。
「お早うございます」
そういって、彼女は、番茶を充たした湯呑を、もう出勤した社員の席へ、配って歩くと、
「やあ、お早う……坊や」
なぞと、頭を撫ぜる者もあった。
春子は色が白くて、肉づきがよくて、十八歳の肉体は、充分に発育してるのだけれど、やや締りのない唇や、頓狂な黒い瞳や、澄んだ大きな声が、いかにも無邪気な印象を与えるところへ、例のセーラー服を着ると、とたんに女学校初級生ぐらいに子供染みてしまって、社員から「坊や」と綽名を頂戴するようなことになるのである。社員の中には、女にかけては、随分抜目のないのもいるのだが、生まれつきの顔の表情と、セーラー服のお蔭で、彼女はいつも安全地帯に立つことができた。
お茶を配ってしまうと、彼女は事務室入口の受付台に、同僚の高橋菊子と、二羽のカナリヤのように、腰かけるのである。朝のうちは、面会人も来ないし、十時ごろ出社してくる重役さんに、最敬礼をするぐらいが仕事であるから、二人はこの時間を、お饒舌をして送ることができる。
「あら、もうお化粧してんの……」
と、春子は、隣りの同僚を見て、大きな瞳を、一層円くした。
「だって……」
高橋菊子は、コンパクトの鏡を覗きながら、一心に、鼻の頭を叩いている。同じセーラー服を着ながら、彼女の方は、パーマネントもかけているし、口紅も赤いし、色気タップリの少女である。
「憚り様。あたしは、あんたみたいに色が白かないんですからね……。そんなことをいうんなら、いい話教えてあげないわよ」
「なによ、いい話って」
「大事件が起きたのよ。あんたの好きなダービンがね……」
「早くいってよ」

「赤チャンを産んだんですって」
「えッ？」
「新聞に、出てたわよ」
「嘘よ、嘘よ。そんなこと、絶対にないわよ」
春子は息を弾ませて、怒ったように、高橋菊子を睨めた。
「ホ、ホ、ホ、心配しなくてもいいわよ。ほんとは、他所の赤チャンの名付親になっただけなのよ。洗礼式の時にジェームスって名をつけてやったんですって」
「そんなことだろうと思ったわ。ダービンがお嫁に行ったり、赤ン坊を産んだりするわけがないわ」
と、春子は、自信に充ちていった。
「あら、ダービンだって、今にきっとお嫁に行くわよ」
「行かないわよ」
「どうして？」
「どうしてッて……」春子はグッと詰まったが、「そんな人じゃないわよ」
「まア、まるでダービンの親類みたいなこといってるわ。あんな女優、どこがいいんだろう」
「いいわよ。高橋さんは、勝手に、千恵蔵の贔屓していればいいわ」
と、春子は頬ペタを膨らませて、横を向いたが、いつまでも怒っていられない性分にできてたので、やがて、ケロリと忘れたように、
「ねえ、高橋さん。あの話どうなったか、知ってる？」
「あの話って」
「日本ダービン募集の話よ。東映と、どこかのレコード会社とで、素人からダービン女優を募集するって話……」
「あれは、一人も試験にパスする者がなくて、延期になったらしいわ。声のいい娘は、顔が悪いし、顔のいいのは、声が悪いのばかりだったそうよ」
と、いうのを聴いて、春子は暫らく考えていたが、
「あたい、応募すればよかったな」
「まア、心臓ね。あんた、女優になってみたいの」
と、大いに意地悪く、驚いて見せる。
「うウん。そうじゃないけど……」
「あんた、声がいいから、自信があるのね」
「だけど、容貌が悪いからなア……」
「容貌がよけりゃア、なる気なの……呆れた。あたし、どんな美人に生まれたって、女優なんかにならないわ。それより、お金持の家に、お嫁に行くわよ」
「あたいだって、女優になりたかないのよ。ただ……」
と、いって春子は、自分でもわからない考えを、強いて纏めるように、小首を傾げて、
「……ただ、何でもいいから、とても、素晴らしいことを、してみたいのよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com